

# 國學院大學学術情報リポジトリ「K-RAIN」

山田孝雄著『萬葉集講義』巻第一における再版本の  
成立過程：典拠の検討を中心に

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 國學院大學大学院文学研究科 公開日: 2023-02-07 キーワード: 山田孝雄, 『萬葉集講義』, 万葉集研究, 国語学, 実証主義, “万叶集”, 万叶集研究, 国語学, 実証主義 作成者: 鈴木, 道代 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.57529/00001634">https://doi.org/10.57529/00001634</a>

# 山田孝雄著『萬葉集講義』巻第一における再版本の成立過程 —典拠の検討を中心に—

The process of establishing a reprinted book in the first volume of  
“*Manyoshukōgi*” by Yoshio Yamada:  
Focusing on the examination of authority

鈴木道代

キーワード：山田孝雄 『萬葉集講義』 万葉集研究 国語学 実証主義  
关键词：山田孝雄 “万叶集讲义” 万叶集研究 国文学 实证主义

## 要旨

山田孝雄は、大正期から昭和30年代に活躍した国文学者であり国語学者である。古典文学に対する造詣が深く、様々な時代やジャンルの作品に対する論考を発表している。その中でも上代文学、特に『萬葉集』の研究は、山田のライフワークだといっている。本稿では、山田が昭和3年に執筆した『萬葉集講義』巻第一の初版本から7年刊行の再版本への校訂の過程において、主に追加した典拠について考察を加える。山田の自筆本を含む蔵書については、富山市立図書館山田孝雄文庫にまとまった形で所蔵されている。その中で、『萬葉集講義』巻第一の版を重ねるにあたり、初版本に書き入れを施した山田の自筆書き入れ本が2冊残されている。山田は校訂にあたり、「語釈」の典拠を数カ所加えている。これらの中には、『万葉集』の用例のほか、漢籍や『萬葉集』以外の上代文献も見られ、また初版から再版の間に入手した文献も校訂に加えた跡が見られる。山田が再版本を刊行するにあたり、より丹念に典拠にあたった軌跡が明らかになるものと考えられる。

## 摘要

活躍于大正时期至昭和30年代的国文学家、国语学家山田孝雄对于古典文学造诣深厚，其著述涉及各个时代及不同体裁的作品。其中，上代文学研究，尤其是以《万叶集》研究贯穿其学术生涯。本稿主要考察山田孝雄于昭和三年执笔的《万叶集讲义》第一卷初版至昭和七年再版的校订过程中，其追加的典据。山田的手稿等收藏于富山市立图书馆山田孝雄文庫，其中包含了山田孝雄因《万叶集讲义》第一卷再版，而在初版基础上亲笔修改的手稿二册。在校订时，山田孝雄添加了多处“语释”，即典据。在这些新加典据中，除《万叶集》以外，还有引自汉籍以及《万叶集》以外的上代文献的例子，亦可见山田孝雄使用了在初版和再版之间新获得的文献进行校订的痕迹。通过以上研究可见，山田孝雄在刊发再版本时，更为细致地查找了典据的清晰轨迹。

## 1. はじめに一『萬葉集講義』の出版の校訂と経緯一

近代日本の国語学者、国文学者として著名な山田孝雄に関する上代文学の研究成果については、国語学の視点からの研究が多い。特に、本稿で対象とする『萬葉集』の注釈書である『萬葉集講義』については、毛利正守氏が国学的視点から言及しているのみであり、その詳細については今日までほとんど検討されてこなかった<sup>(1)</sup>。

なお、この『萬葉集講義』を含む山田の膨大な蔵書については、富山市立図書館に山田孝雄文庫としてまとまった形で保管されており、山田自身が書き残した原稿や書入れ本も数多く残されている<sup>(2)</sup>。本稿では、その中でも『萬葉集講義』巻第一初版の自筆書入れ本に着目したい。

『萬葉集講義』巻第一の出版は、昭和3(1927)年に初版(以下「初版本」)を刊行し、昭和7(1932)年に増補再版(以下「再版本」)、そして昭和13(1938)年にさらに増補三版を重ねている<sup>(3)</sup>。この書について、版を重ねるにあたり、山田は初版本に書入れを行っている。山田孝雄文庫には、『萬葉集講義』巻第一の書入れ本が2冊存在する。一冊は、表紙の見返りに『萬葉集講義』巻第一(A)、もう一冊には『萬葉集講義』巻第一(B)訂正原本の貼り紙がある。特に、B本の奥付には、朱書きで、「昭和五年 月 日訂正増補再版印刷／昭和五年 月 日訂正増補再版発行」との書入れあることから、増補再版するための手控えであった可能性が考えられる。

ところで、山田孝雄は『萬葉集講義』を執筆した経緯について、初版の「自序」で次のように記している。

大正十年四月山本まち子女史内海弘藏氏の紹介により、來りてこの集の講義

- 
- (1) 毛利正守「山田孝雄博士と萬葉集について」(『高岡市萬葉歴史館論集一六 萬葉集と富山』笠間書院、2016年)
  - (2) 富山市立図書館山田孝雄文庫の蔵書については、富山市立図書館『山田孝雄文庫目録 洋装本の部』(富山市立図書館、1999年)、富山市立図書館『山田孝雄文庫目録 和装本の部』(富山市立図書館、2007年)にまとめられている。
  - (3) 昭和13年刊行の奥書には、「昭和十三年一月二十五日三版刊行」とのみ記されているが、現在調査した限りでは、「昭和十五年七月一日訂正増補五版発行」「昭和十八年八月五日訂正増補七版発行」などがあり、こども「増補三版」とみてよいと思われる。また、五版、七版は、三版と同様の内容であり、実際は2回の校訂を行ったものを見られる。

してよと請はる。蓋し、同女史は故萩の家の舊同人の爲にせむとの事なり。されど、余は上の如き理由を以て固く辭したりき。女史之をゆるさず。熟惟ふに、故落合直文氏には一度面會せしのみなれど、片田舎の一教師を訪はむとて當時名聲噴々たりし萩の家主人のわざへ―百數十里を遠しとせずして駕を枉げられしことを思へば、知己の感は忘るゝ事能はざる所なり。ここにその舊同人の爲にせよと懇請せらるるに對して情誼辭する能はざるものあり。さらば共に研究せむとて終に之を諾しぬ。ここに於いてまち子女史丸岡てい子女史その他諸氏の爲に講筵を開きぬ。これこの萬葉集講義の濫觴なり。されど、もとより萬葉集を知れる我にあらねば、従來の説につきて従ふべきと従ふを得ざるとをあげ、なほ私見あるものは之を述べて諸氏の參考に供したりき。かくて巻第二の半に至りて一時休止せしが、大正十二年の大震災によりてこの事全く止みぬ。大正十四年に至り、はからず、東北帝國大學の講座を擔任するに及びて、再び之を講ずべくなりぬ。この講義はそれらの講案を清書したるに止まる。<sup>(4)</sup>

大正10年4月に山本まち子と内海弘藏の二人の紹介で、落合直文の萩の家の旧同人に開講するために研究を始めたことがきっかけとなったという。さらに、一度巻2の半ばで休止し、さらに大正12年の関東大震災で全くやめてしまったが、大正14年に東北帝國大學の講座を担当することとなり、この講義の講案を清書し、『萬葉集講義』を制作したのだと記されている。

このような経緯で昭和3年に『萬葉集講義』巻第一が刊行された。さらに、昭和7年に訂正増補版を刊行するに至った理由については、「再版の辭」で次のように記している。

### 再版の辭

萬葉集講義巻第一を世に送りてより既に五年を経たり。されど、この巻に存する問題は一も解決せられたるを見ざるを遺憾とする。本書の所説の不備なることはもとよりいふをまたず。しかも著者また努力を惜むものにあらず。

(4) 『萬葉集講義』を執筆した経緯や巻第三で終了している理由については、山田俊雄「山田孝雄——合理性と情熱」(『古代文学』55巻11号、2003年11月)で触れられている。

今巻第二を公にせむとするにあたり、この巻に於ける誤字を正し、若干の訂正を加へて版を改めしめたり。ここに説明の稍委しくなれるもの五六、本文のよみ方を改めしもの一、(六七の「物戀之伎」)更に元の索引を更訂して國語索引と名づけ、新に漢字の索引を加へたり。この誤字の訂正につきては文學丸山諒男君の助力少からず。今これらの事を記して再版の辭とす。

昭和七年四月五日

まずは初版に不備があること、また巻第二を刊行するにあたって誤字を正し、若干の訂正を加えて改め、説明を委しくしたものが5、6箇所、本文の読み方を改めた所、1カ所、索引を校訂したほか、漢字索引を作成したのだという。しかし、再版本で実際に校訂した箇所は、細かい箇所を含めると、30カ所以上にのぼる<sup>(5)</sup>。それだけではなく、実際に校訂はしなかったが、A本とB本に書入れた箇所も含めると、60箇所以上にのぼる。修正箇所の内容については、誤植や語釈の言い回しなどの訂正、または歌の訓みや表記の訂正など多岐にわたる<sup>(6)</sup>。

本稿では、これらの修正箇所の中でも、語釈の用例を追加した箇所に着目したい。なぜなら、山田孝雄の蔵書と深い関わりがあると考えられるからである。『萬葉集講義』巻第一と山田の蔵書とを検討することにより、再版で用例箇所を校訂した経緯について明らかになるものと考えられる。

## 2. 語釈部分における『万葉集』の用例の追加

ここでは、語釈における『万葉集』の用例についての書入れについて、概観しておきたい。語釈における『万葉集』用例の書入れについては、B本のみ書入れをしたものが全4例、A本、B本の両書に書入れをしたものが全5例あり、いずれも再版本に反映させている。

---

(5) 別表を参照。別表は、山田孝雄文庫蔵の書入れA本、B本の書入れを調査した上で、再版本にいかにか校訂したかを表として示したものである。

(6) 「再版の辭」にて指摘されている、巻1・67の「物戀之伎」の訓みについては、拙稿「山田孝雄著『萬葉集講義』における研究態度—『萬葉集』巻一・六七「物戀之伎乃」をめぐって—」(『東アジア比較文化研究』20号、東アジア比較文化国際会議日本支部、2021年12月)において検討した。

- (1) カスミタツ ナガキハルヒ ノ クレニケル ワ ヅキモシ ラ ズ ムラキモノ コヽロヲイタミ ス エコドリ ウラナキヨレバ  
 震立 長春日乃 晩家流 和豆肝之良受 村肝乃 心乎痛見 奴要子鳥 卜歎居者  
ケマダスキ カケノヨロシク トホツカミ ワガオホキミノ イデマシノ ヤマコスカゼノ ヒトリヨル ワガコロモテ ニ アサヨヒニ  
 珠手次 懸乃 宜久 遠 神 吾大王乃 行幸乃 山越風乃 獨座 吾衣手爾 朝夕爾  
カハラヒ スレバ マスラ ヲト オモヘルワレモ クサマクラ タビニシアレバ オモヒヤル タヅキ ヲシラニ アミノウラ  
 還 比奴禮婆 大夫登 念有我母 草枕 客爾之有者 思遣 鶴寸乎白土 網能浦  
ノ アマヲトメラ ガ ヤキシホノ オモヒゾモユル ワガシタゴヽロ  
 之 海處女等之 燒鹽乃 念 曾所燒 吾下情 (1・5) (7)

初版本

震立 「カスミタツ」とよみて春日の枕詞とす。「震」は和名抄に「和名加須美」とあり。

A本<sup>(8)</sup>

「震」は和名抄に「和名加須美」とあり。」の右傍に、「可須美多郡那我岐波流卑乎」卷五、八四七」とある。

B本

震立 「カスミタツ」とよみて春日の枕詞とす。「震」は和名抄に「和名加須美」とあり。その例は卷五「八四七」に「可須美多郡那我岐波流卑乎」などあり。「震」は和名抄に「和名加須美」とあり。

再版本

震立 「カスミタツ」とよみて春日の枕詞とす。「震」は和名抄に「和名加須美」とあり。その例は卷五「八四七」に「可須美多郡那我岐波流卑乎」などあり。「震」は和名抄に「和名加須美」とあり。<sup>(9)</sup>

- (2) フユゴモリ ハルサリクレバ ナカザリ シ トリモ キナキヌ サカザリ シ ハナモ サケレド ヤマヨシゲミ イリテ  
 冬木成 春去來者 不喧有之 鳥毛來鳴奴 不開有之 花毛佐家禮杼 山乎茂 入而  
モトラス クサフカミトリテ モミズ アキヤマノ コノハ ヲミテハ モミヂヲ バトリテゾシヌ フ アヲキ  
 不取 草深 執手母不見 秋山乃 木葉乎見而者 黃葉乎婆 取而曾思奴布 青  
ヨバ オキテゾナゲク ソコシウラメシ アキヤマワレハ  
 乎者 置而曾歎久 曾許之 恨之 秋山吾者 (1・16)

初版本

五音の句を六音にせる例は集中に少からず。かくてその意山が茂きによりてなり。

- (7) 『万葉集』の本文および書き下しは、山田孝雄『萬葉集講義』初稿本による。七年版で本文を改訂してる箇所も、初稿本のままとしている。なお、『萬葉集講義』の底本は、凡例によると寛永版本を用いている。  
 (8) A本の書入れのほとんどは、欄外に挿入されている。  
 (9) 下線部にて、校訂した箇所を示す。以下同じ。

A本

卷二、「二〇八」黄葉乎茂

B本

五音の句を六音にせる例は集中に少からず。なほいはゞ卷二「二〇八」に「黄葉乎茂」とあるは同じ趣なるにそこは古來「シゲミ」とよみて異論なく、ここにのみ異説あるはいぶかしき事なり。かくてその意山が茂きによりてなり。<sup>(10)</sup>

再版本

五音の句を六音にせる例は集中に少からず。なほいはゞ卷二「二〇八」に「黄葉乎茂」とあるは同じ趣なるにそこは古來「シゲミ」とよみて異論なく、ここにのみ異説あるはいぶかしき事なり。かくてその意山が茂きによりてなり。

(1) は、「霞立つ」の用例を加えた箇所である。「霞立つ」の用例は、『万葉集』中、16首17例あるが、その中でも「カスミタツ」の訓みが分かる歌が2首(巻20・4300と掲載歌)の内、一首を加えている<sup>(11)</sup>。(2) は、『万葉考』以降、「茂」を「シミ」と訓むことが主流となった状況に異論を唱え、寛永版本の訓みである「シゲミ」のままとする<sup>(12)</sup>。その根拠として、形容詞の語幹として「シゲ」は問題ないが、「シミ」の「シ」は、形容詞の語幹として用例が認められないということによる。そして、再版本では、「シゲミ」と訓む根拠として、『万葉集』の用例を加えるのである。この山田の論により、山田以降の多くの注釈書は、「ヤマヲシゲミ」と訓むようになる。山田の国語学的で実証主義的な研究が、今日の万葉研究に繋がっているのである。

### 3. 語釈部分における『万葉集』以外の用例の追加

ここで注目したいのは、『万葉集』以外の引用をどのように再版本に取り入れたかという点である。1つ目は、巻1・50の「新代登」の訓みである。

---

(10) P97左上欄外に「卷三「三〇八」に「黄葉乎茂」とあるは草木「シゲミ」とよみて異論なし。」と加えるも×にて削除する。

(11) 17例の中には、「春霞立つ」(巻13・3227)の用例も含む。

(12) 山田は語注において、「『茂』は舊訓「シゲミ」とよみたるを考(筆者注：賀茂真淵『万葉考』に「しみ」とよみたりしより諸家皆それによれり。」と指摘する。

- (3) ヤスミシシ ワガオホキミ タカテラス ヒ ノ ミ コ アラタヘノ フジハラガ ウ ヘ ニ ラスクニヨ メ シタマハム ト  
 八隅知之 吾大王 高照 日之皇子 荒妙乃 藤原我宇倍爾 食国乎 賣之賜 牟登  
 ミアラカハ タカシラサ ム ト カムナガラ オモホスナ ヘ ニ アメツチモ ヨリ テアレコ ソ イハハシル アフミ ノ クニノ  
 都宮者 高所知武等 神長柄 所念奈戸二 天地毛 縁而有許會 磐走 淡海乃國之  
 コロモデ ノ タナカミヤマ ノ マ キ サ ク ヒ ノ ツマデ ヲ モ ノ フ ノ ヤ ソウヂカハニ タマモナス ウカベナガセ  
 衣 手能 田上山之 眞木佐苦 檜乃孀手乎 物之布能 八十氏河爾 玉藻成 浮流  
 レ ソ ヲトルト サ ワ グ ミタミモ イハワスレ ミモ タナシラス カモジモノ ミヅニウキヒ テ ワガツクル ヒ  
 禮 其乎取登 散和久御民毛 家忘 身毛多奈不知 鴨自物 水爾浮居而 吾作 日  
 ノ ミカドニ シラスタニ ヨリ コセヂヨリ ワガクニ ハ ト コヨ ニナラム フミオヘル アキシカメモ アラタヨト  
 之御門爾 不知國 依巨勢道從 我國者 常世爾成牟 圖負留 神龜毛 新代登  
 イヅミノカハニ モチコセル マキノツマデヲ モモタラズ イカダニツクリノボスラム イソハク  
 泉 乃河爾 持越流 眞木乃都麻手乎 百不足 五十日太爾 作 泝須良牟 伊蘇波久  
 ミレバ カムナガラ ナラシ  
 見者 神隨爾有之 (1・50)

### 初版本

天元書寫の琴歌譜に、／阿良多之支、止之乃波之女爾、可久之已曾、知止世乎可禰弓、多乃之支乎倍女。／といふ歌あり。

### A本

鍋島侯爵家藏の催馬楽新年にも安良多之支止之乃波之女尒などあり。

### B本

天元書寫の琴歌譜に、阿良多之支、止之乃波之女爾、可久之已曾、知止世乎可禰弓、多乃之支乎倍女。又鍋島侯爵家藏の古写本催馬楽にも新年の歌の詞に「安良多之支止之乃波之女尒」とあり。

### 再版本

天元書寫の琴歌譜に、阿良多之支、止之乃波之女爾、可久之已曾、知止世乎可禰弓、多乃之支乎倍女。又鍋島侯爵家藏の古写本催馬楽にも新年の歌の詞に「安良多之支止之乃波之女尒」とあり。

この箇所については、初版本の記述では、まず底本の訓みである「アタラヨ」を示すが、荒木田久老に従い、「アラタヨ」とする。山田は古代の「新し」を「アラタシ」と訓んだ例として、『萬葉集』巻18・4106の「春花能、佐可里裳安良多之家牟、等吉能沙加利會」<sup>(13)</sup>を引用し、さらに天元書寫の『琴歌譜』を挙げ、「これは平安時代のものなれど、古くよりかくいひしを傳へしものなるべし。…(中略)…その「あらたし」が「あたらし」となるに至りしは平安朝の時代よりなり」と指

(13) 山田は4106番歌を用例としてあげるが、ここは校異と解釈に揺れのある箇所である。山田は底本の訓みにより、現在定説となっている古義の「安良牟等末多之家牟」の訓みを退ける。

摘する。そして、さらにA本、B本の書入れにおいて、鍋嶋侯爵家蔵の『催馬楽』を挿入するのである。A本では、欄外に、B本では、同内容を本文中に挿入している。山田は『催馬楽』について、大正15(1926)年に天治本催馬楽抄解説(古典保存會本)を刊行している。また、山田の『催馬楽』に関しては、『山田孝雄文庫目録』によると以下の本を所蔵していた。

- ①催馬楽No.5966 明治四十二年(一九〇九)写 外題なし 内題：催馬楽  
扉：大原来迎院蔵／催馬楽 奥書：[孝雄自筆] 明治四十二年九月二十日雨中に之をうつす／たゞ本文及己が研究に必要な部分の影写に／とゞめ博士その他の注釈めきたるものを悉くうつす違／あらず而後更に來らは委しく写すべきなり／山田孝雄
- ②催馬楽No.5967 佐々木信綱編 竹柏會 昭和六年刊 題簽：催馬楽 目録題：催馬楽 複製本 複製の底本：鍋嶋家蔵 別冊：「催馬楽鍋嶋家本解説」六ページ
- ③催馬楽No.3792 東遊／催馬楽 江戸後期写
- ④催馬楽入綾No.5968 三卷 橘守部撰述 天保十二年(一八四一)跋刊
- ⑤催馬楽抄No.3811 東京 古典保存會 大正十五(一九二六)刊 題簽：催馬楽抄 首題：催馬楽抄 影印本：影印の底本：東京帝室博物館蔵 解説：「東京帝室博物館御蔵 天治本催馬楽抄 解説」山田孝雄解説
- ⑥催馬楽抄No.3825 天治本催馬楽抄 附弘安本催馬楽抄 大正八(一九一九)序刊 題簽：天治本催馬楽抄附弘安本催馬楽抄 内題：催馬楽抄 複製本 複製の底本／東京帝室博物館蔵本 大原来迎院所伝本 序：「大正八年四月 山田孝雄識」 刻奥書：「明治四十二年九月二十日雨中に之をうつす／たゞ本文及己が研究に必要な部分の影写に／とゞめ博士その他の注釋めきたるものを／悉くうつす違あらず向後更に來らは委しく／写すべきなり 山田孝雄」<sup>(14)</sup>

蔵書目録によると、②の昭和6年に刊行された佐々木信綱編、鍋嶋家蔵の「催馬楽」がある。一方で、⑤は、山田自身が解説を書いた天治本『催馬楽抄』であ

---

(14) Noおよび書誌情報は、注2による。以下同じ。



同僧尼令の文の解に「禾知國司直申官哉、爲當先經玄番哉」又文鏡秘府論に「竊疑正聲之已失爲當時運之使然」等その他用例頗ぶる多し。

この箇所<sup>5</sup>の先行研究では、『萬葉集古義』が、『日本後紀』『令集解』『春秋左氏伝』の疏、『楞嚴經』を「為当」の典拠としてあげている。山田は、「『爲當』は支那の熟字にて國語の『ハタ』にあたる意をあらはせりと見ゆ。」として、『萬葉集古義』が挙げた用例の他に、『日本書紀』や『顔氏家訓』の用例を挙げ、更に再版本に『文鏡秘府論』を加えるなど、より実証主義の立場をとる。また『文鏡秘府論』について、山田自身は、昭和10(1935)年に『文鏡秘府論解説』(古典保存會本)を刊行している。『文鏡秘府論』の蔵書については、以下の通りである。

- ⑦文鏡秘府論No.6562 遍照金剛(空海)撰 東京 古典保存會 昭和十(一九三五)刊 題簽：文鏡秘府論 地 首題：文鏡秘府論 地 影印本 影印の底本：徳富猪一郎蔵 解説：「徳富猪一郎氏蔵 文鏡秘府論 解説」山田孝雄執筆
- ⑧文鏡秘府論No.6563 六卷 遍照金剛(空海)撰 東京 東方文化學院 昭和五(一九三〇)刊 六冊 [東方文化叢書 第一] 題簽：文鏡秘府論 首題：文鏡秘府論 影印本 底本：高山寺本
- ⑨文鏡秘府論No.6564 六卷 遍照金剛(空海)撰 京都 著屋宗八 江戸後期刊 三冊 題簽：文鏡秘府論 首題：文鏡秘府論 版心書名：「秘府論」 裏表紙見返：「佛書畧目錄 京都書林 寺町通三條下ル町 著屋宗八」第一冊一丁内題下に朱筆書入「朱字宮内省蔵／高山寺旧蔵本」あり、校合書入れあり

自分自身が解説を書いた⑦以外に、⑧と⑨の蔵書が存在する。⑨の方は今後調査が必要となるが、⑧は、昭和5年に東方文化叢書から刊行されたものになり、3年版では入れることができなかつたものを、7年版に用例として入れることができたという可能性が考えられる。

3つ目は巻1・79番歌の「萬段」の訓みについてである。

(5) オホキミノ ミコトカシコミ ニギヒニシ イハラオキテ コモリクノ ハツセノカハニ フネウケテ ワガヌクカハノ  
天皇乃 御命畏美 柔備爾之 家乎擇 隱 国乃 泊瀬乃川爾 麒浮而 吾行河乃

カハクマノ ヤ ソクマオチズ ヨロヅタビ カヘリミ シツツ タマホコノ ミチユキクラシ アヲニ ヨシ ナラノ ミヤコ ノ サ ホ  
 川隈之 八十阿不落 萬段 顧 爲乍 玉粹乃 道行晚 青丹吉 檣乃京師乃 佐保  
 ガハニ イユキイタリ テ フガネタル コロモノ ウヘユ アサヅク ヨ サヤカニミレバ タヘノ ホニ ヨルノ シモフリ イハ  
 川爾 伊去至而 我宿有 衣乃上從 朝月夜 清爾見者 梲乃穗爾 夜之霜落 磬  
 ドコト カハノ ヒコリテ サムキヨ ヨ イコフコト ナク カヨヒツツ ツクレルイヘニ チ ヨマデニ キマセオホキミト ワレ  
 床等 川之氷凝 冷夜乎 息言無久 通乍 作家爾 千代二手 來座多公與 吾  
 モカヨハム  
 毛通武 (1・79)

初版本

「萬」に「ヨロヅ」の訓あるは論なし。されど、「段」を「タビ」とよむ理由は治定せりといふべからず。

A本

銕杖夙三百段、日三百段、夕三百段合テ九百段毎日打迫／靈異記上、卅

B本

「萬」に「ヨロヅ」の訓あるは論なし。靈異記上第三十話に「銕杖夙三百段、日三百段、夕三百段合テ九百段毎日打迫」とあるは「段」を「タビ」の意に用ひし例なり。されど、「段」を「タビ」とよむ理由は治定せりといふべからず。

再版本

「萬」に「ヨロヅ」の訓あるは論なし。靈異記上第三十話に「銕杖夙三百段、日三百段、夕三百段合テ九百段毎日打迫」とあるは「段」を「タビ」の意に用ひし例なり。されど、「段」を「タビ」とよむ理由は治定せりといふべからず。

山田は初版の語注では、「萬段」について、次のように述べている。

古寫本には「モモツタヒ」「モモハシニ」とよめるあり。されど、この「萬段」の文字は上に引ける巻二の長歌にもありて（筆者注：巻2・131「此道乃、八十隈每、萬段、顧爲騰」<sup>コノミチノ ヤ</sup>）、同じきよみ方をなせるのみならず、巻二十「四四〇八」に「與呂頭多比、可弊里見之都追」とあるによりて「ヨロヅタビ」とよむをよしとするなり。<sup>(15)</sup>

巻2・131の「萬段、顧爲騰」<sup>ヨロヅタビ カヘリミスレド</sup>と巻20・4408の「與呂頭多比、可弊里見之都」<sup>ヨロヅタビ カヘリミスレド</sup>

(15) 古写本では古葉畧類聚鈔が「モモツタヒ」と訓じ、紀州本（左に「ヨロツタヒ」とある）、細井本が「モモハシニ」と訓ず。また、温故堂本、大矢本、京都大学本は左に「モモハシニ」とある。

追」の歌表現が近似していることから、「萬段」は「ヨロヅタビ」と訓むのだと説明するが、「されど、『段』を『タビ』とよむ理由は治定せりといふべからず」というように、これを根拠とすることに満足しない。そこで、再版本への改訂において、「段」を「タビ」と読む例として、『日本靈異記』の上巻30縁の用例を挿入するのである。しかし「『段』を『タビ』とよむ理由は治定せりといふべからず」の一文は、再版本においても、削除することはできなかった。なぜなら、山田が所蔵する『日本靈異記』の蔵書においても、「段」を「タビ」と訓む根拠が見いだし難かったからである。

山田の『日本靈異記』の蔵書は以下の通りである。

『山田孝雄文庫目録（和装本の部）』

- ⑩日本国現報善悪靈異記No.6091 零本 近代写 外題なし 尾題：大日本国現報善悪靈異記 奥書：「謄写本灵異記中下二卷文學博士木村正辞翁／之蔵書也中間末有屋代臨池翁自筆跋／是即類聚本之原本也云実為稀世之珍書／但中巻映寫似稍失其眞誠可惜矣余借覽之／序願手寫一本而藏于家然無其暇僅抄出／卷首数葉并下巻中仮字語釈之可為徵古之／資者而止耳 明治卅六年四月念三日水齋記
- ⑪日本国現報善悪靈異記No.6092 景戒録／佐伯良謙輯 京都 便利堂 昭和九（一九三四）刊 題簽：日本国現報善悪靈異記 首題：日本国現報善悪靈異記 影印本 卷末：「興福寺日本國報善悪靈異記解説」（大家徳城著）
- ⑫日本國靈異記卷下No.6093 景戒録／禪惠（筆） 東京 育徳財團 昭和六（一九三一）刊 外題：日本國靈異記卷下 首題：日本國現報善悪靈異記卷下 複製本 複製の底本：前田家蔵 別冊：「前田本日本靈異記解説」一六頁
- ⑬日本國靈異記卷下No.6094 景戒録／禪惠（筆） 東京 育徳財團 昭和六（一九三一）刊 外題：日本國靈異記卷下 首題：日本國現報善悪靈異記卷下 複製本 複製の底本：解説 一六頁

『山田孝雄文庫目録（洋装本の部）』

- ⑭日本古典全集No.00859 第一回〔第一二〕与謝野寛ほか編纂・校訂 日本古典全集刊行会 第一回〔第一二〕狩谷椴斎全集 第一 景戒〔著〕狩谷椴斎〔校訂〕
- ⑮羣書類従No.00685 第一七輯 塙保己一〔編〕日本靈異記

- ⑯校本日本靈異記 No.08171 景戒〔著〕 国学院大学修練報国団学術部編  
東京 明世堂書店 一九四三
- ⑰日本靈異記No.08175 景戒〔著〕 板橋倫行校註 東京 角川書店 一九  
五七
- ⑱日本靈異記No.08176 景戒述 板橋倫行校訳 東京 春陽堂 一九二九

山田の『日本靈異記』に関する蔵書の和装本は4冊であるが、中、下巻しか所持していない。このことから『日本靈異記』については、洋装本を見ていたことが考えられる。そこで見た可能性があるのが、⑭の狩谷椽斎『日本靈異記攷証』、もしくは⑮の「群書類従」、⑰の板橋倫行校訳の『日本靈異記』が考えられる。しかし、⑭⑮において、「段」を「タビ」と訓むことについては、いずれにおいても指摘されていない。唯一訓みが書かれている板橋倫行の『日本靈異記』について

てつ つみ だん ひ だん ゆふべ だん あは だん ひこと う せ  
鐵の杖夙に三百段、日に三百段、夕に三百段、合せて九百段、日毎に打ち追  
む。

とあるように、「タビ」とは訓んおらず、先行研究でも、この箇所については、『日本靈異記』のみならず他の文献も指摘されていないという状況である。

また山田は、前例の『催馬楽』や『文鏡秘府論』と違い、『日本靈異記』についての、論文を発表したり、著書を刊行したりした形跡は見られない。『萬葉集講義』を校訂するにあたり、『日本靈異記』の用例をどのような背景や発想によって挿入したかは不明であると言わざるを得ない<sup>(16)</sup>。

#### 4. おわりに

本稿では、山田孝雄著『萬葉集講義』巻第一について、富山市立図書館蔵の『萬

(16) 山田以降の注釈書においても「萬段」の訓みの根拠については明らかになっていない。新編日本古典文学全集本『萬葉集』が、「『万段』とあるが、『段』をタビと読む理由が不明。ただ唐招提寺蔵『古本令私記』断簡(菅繼令)に「一度、一段」とあるのが参考となるか。また『段』は『般』(中国の俗語的用法)の誤りと考えられる」とし、新日本古典文学大系『萬葉集』が、「『万段頓首』(「大津大浦啓」天平宝字二年。漢籍の用例未見。)」と指摘するのみである。

葉集講義』巻第一書入れ本(A本、B本)を通して、いかなる校訂を経て、昭和七年訂正増補再版を刊行したか、特に再版本にて語釈に書き入れた典拠となる用例について、山田の蔵書との関わりを考察した。

A本、B本に見られる用例を挿入する書入れについては、『万葉集』の用例も五例見られるが、『万葉集』以外の校訂も数カ所見られた。『催馬楽』については、山田自身、天治本『催馬楽抄』の解説を行っているが、校訂の際に用いたのは、昭和六年に刊行された鍋嶋家本『催馬楽』であり、初版から再版本の間に、山田が新たに手に入れたものでもあった。この点については、鍋嶋家本と天治本とに校異があり、山田が、鍋嶋本の方が正しいと判断したためであることが明らかとなった。また、『文鏡秘府論』についても、昭和十年に徳富猪一郎蔵『文鏡秘府論』の解説を行っており、昭和五年刊行の『文鏡秘府論』(東方文化學院)などを確認した上で校訂したことが考えられる。さらに『日本靈異記』については、特に山田自身論文や著書などは刊行しておらず、また他の注釈書でも指摘されていない。山田は群書類従、もしくは狩谷掖斎の『日本靈異記攷証』、板橋倫行校訳『日本靈異記』などを確認して、当該箇所を書入れをした可能性が考えられるが、この『日本靈異記』の用例をいかなる背景によって挿入したかは不明であるものの、注釈作業において実証主義を貫く山田の態度が明らかとなった。

また、『萬葉集講義』巻第一自体の成立については、山田孝雄文庫に所蔵されている山田自らが朱筆、藍筆の書き入れを行った寛永版本があり、注釈の作成にあたっての予備調査を書き留めていると思われることから、今後注釈書自体の成立過程についても明らかになると考える。

本稿は富山市立図書館山田孝雄文庫の調査結果の一部となります。富山市立図書館の皆様、特に水島様の協力を賜りました。厚く御礼申し上げます。また、本研究は富山県立高志の国文学館、富山文化の調査・研究を支援する「高志プロジェクト」特別枠「大伴家持」の研究成果の一部です。



	昭和3年2月発行「萬葉集講義」 巻第一	昭和3年3月発行「萬葉集講義」 巻第一(B) 書き入れ部分	昭和3年3月発行「萬葉集講義」 巻第一(A) 書き入れ部分	昭和7年発行	昭和13年発行 (3版)
13 p5813	6 寝夜不落	「寝」を「寐」	「寝」を「寐」	書き入れ反映せず(B)	
14 p58112	6 寝夜不落	「寝」を「寐」	「寝」を「寐」	書き入れ反映せず(B)	
15 p8219	13 雲根火雄男志等(ウネヒヲララント)		「火(ヒ)」の訓みを「ヒ」とする。		
16 p9017	15 豊康雲爾(トヨハタクモニ)		「雲(クモ)」の訓みを「クモ」とする		
17 p9017	15 今夜乃月夜(コヨヒノツククヨ)		「月(ツク)」の訓みを「ツク」とする。		
18 p96	柱 17	16	16	書き入れ反映せず(B)	
19 p97左上	16	「卷三「三〇八」に「黄葉乎茂」とあるは草木「シゲミ」とよみて異論なし」と加えるも×にて削除する。	「卷二、「二〇八」黄葉乎茂」を加える。		
20 p9815	16	されば古來の訓に従ひて「ヤマヲシゲミ」とよむべきなり。	「きなり。」を削除して「し。」とする。	書き入れ反映 (B)	
21 p9816	16	五音の句を六音にせる例は集中に少からず。かくてその意山が茂きによりてなり。	「かくてその意」の上に、「なほいはるは卷二「二〇八」に「黄葉乎茂」とあるは同じ趣なるにそこは古來「シゲミ」とよみて異論なく、こここにのみ異説あるはいぶかしき事なり。」を挿入する。	書き入れ反映 (B)	
22 p99117	16	考の説にては「もみぢたるものをば」の意とせむとてかくよめるならむが、若し然らば、連體形よりして、「もみづるをば」とよまざるべからず。終止形に「を」をつけて上の如き意をあらはすことは文法上あるべきことにあらず。	「終止形に「を」をつけて上の如き意をあらはすことは文法上あるべきことにあらず。」を削除する。	書き入れ反映 (B)	
23 p103116	17 伊積萬代爾(イツモルマデニ)		「積」の下に「流」を加える。	書き入れ反映 (B)	
24 p10513	17 伊積萬代爾		「積」の下に「流」を加える。	書き入れ反映 (B)	
25 p113右上	19				
26 p12911	23 射等龍術四間乃(イラコガシマノ)				
27 p130116	23 イラコガシマノ」とよむ。				
28 p13416	25 雪音降家留(ユキハフマル)		「降」を削除し、「落」とする。	書き入れ反映せず(B)	
29 p145110	29 大宮處(オオミヤコロ)		「處(トコロ)」の訓みを「ゴ」とする。		
30 p14818	29 かくの如き語遣は卷三に「國之盡」(三二「八之盡」(四六〇)などある傍例あり。	「卷三に「國之盡」の上に「卷二に「日之盡」(一九九)を加える。	「處(トコロ)」の訓みを「ドコロ」とする。	書き入れ反映せず(B)	

	昭和3年2月発行 『萬葉集講義』 巻第一	昭和3年3月発行 『萬葉集講義』 巻第一(B) 書き入れ部分	昭和3年3月発行 『萬葉集講義』 巻第一(A) 書き入れ部分	昭和7年発行	昭和13年発行 (3版)
31 p1778	36 『イハバシル』		[ハ]を削除し、「ハ」とする。		
32 p17710	36 『イハバシル』		[ハ]を削除し、「ハ」とする。		
33 p17915	38 安見知之吾大王之	大王之の「之」を削除	大王之の「之」を削除	書き入れ反映(B)	
34 p19515	潮左爲二(シホヤキニ)、五十等兒 乃(イラコノ)、島邊務船荷(シマ ヘコグフネニ)、殊養良六鹿(イモ ルラムカ)、荒島回乎(アラキシ マミヲ)。	「五十等兒乃(イラコノ)、島邊務 船荷(シマヘコグフネニ)」「島 」の前の読点を削除し、「務」の前に 加える。	「五十等兒乃(イラコノ)、島邊務 船荷(シマヘコグフネニ)」「島 」の前の読点を削除し、「務」の前に 加える。また「兒(コ)の訓みを、「ゴ」とす る。	書き入れ反映せず(B)	
35 p21312	46 寝毛宿目八方	「寝」を削除し、「麻」とする。	「寝」を削除し、「麻」とする。	書き入れ反映せず(B)	
36 p21313	46 古来、「アキノノニ」とよみり。		「み」を削除し、「め」とする。	書き入れ反映(A)	
37 p21619	48 月西渡(ツキカタフキヌ)		「西渡(カタフキヌ)」の訓みを「カ タフキヌ」とする。		
38 p22112	50 所念奈戸二(オモホスナヘニ)		「戸(ヘ)」の訓を「ベ」とする。	書き入れ反映(B)	
39 p22113	50 物之布能	「之」を削除し、「乃」とする。			
40 p2221	50 浜須良武(ノボスラム)		「武」を削除し、「牟」とする。		
41 p236110 -11	天元書寫の琴歌譜に、 阿良多之支、止之乃波之女郎、可 可久之已曾、知止世乎可羅弓、多 乃之支乎倍女。 といふ歌あり。	改行なし。また、「多乃之支乎倍 女」のあとに、「又錦崎候御家藏の 古写本催馬楽にも新年の歌の詞に 「安良多之支止之乃波之女尔」とあ り。」を加える。	「阿良多之支、止之乃波之女郎、可 可久之已曾、知止世乎可羅弓、多 乃之支乎倍女。」の上に、「鶴島侯家 藏の催馬楽新年にも安良多之支止 之乃波之女尔」とあり。	書き入れ反映(B)	
42 p2752	59 巻四	「巻三」に修正する。	「四」を削除し「三」とする。	書き入れ反映(B)	
43 p2862	62 この人の事上「五五」にいへり。		「五五」を削除し、「五六」と する。		
44 p2984	65 「直稱須美之歌」		「之」を削除し、「乃」とする。	書き入れ反映(A)	
45 p3047	67 物戀之伎乃(モノコヒギノ)	「物戀之伎乃(モノコヒギノ)」に 修正する。		書き入れ反映せず(B)	昭和3年版に 戻す
46 p30415	67 されど然せば、歌主の鳴くことと なるべきが、それが誰に聞えぬを いへるにか。趣意とほらずといふ べし。			されど然せば、歌主の鳴くことと なるべきが、それが誰に聞えぬを いへるにか。趣意とほらずといふ べし。	

	昭和3年2月発行 「萬葉集講義」 巻第一	昭和3年3月発行 「萬葉集講義」 巻第一(B)	昭和3年3月発行 「萬葉集講義」 巻第一(A)	昭和7年発行	昭和13年発行 (3版)
47 p30513-5	余按ずるに諸家皆惑へるに似たり。これは舊訓の如く、文字のまま「モノコヒシキノナクゴトモ」とよみてありぬべし。「ものこひし」とは何と冠まりたることもなく…	「余按ずるに諸家皆惑へるに似たり。これは舊訓の如く、文字のまま「モノコヒシキノナクゴトモ」とよみてありぬべし。」を削除し、「按するに「戀之」は形容詞としては「コホシ」とよむべし。日本紀巻五十六の歌に「枯真之根」又本集巻五には「古保之根」(八三四)「故保斯苦」(八七六)などありて「コヒシ」といへるは巻十四以下にはあらはれたり。されば古くは「コホシ」なりしならむ。さてその」とする。「ものこひし」の「ひ」を削除し、「ほ」とする。	昭和3年3月発行「萬葉集講義」巻第一(A)書き入れ部分	書き入れ反映 (B)	昭和3年版に戻す
48 p30517	「ヒ」を削除し「ホ」とする。	「ヒ」を削除し「ホ」とする。		書き入れ反映 (B)	昭和3年版に戻す
49 p30518	「ものこひしきしぎ」といふべきを	「ひ」を削除し「は」とする。		書き入れ反映 (B)	昭和3年版に戻す
50 p3051上			澤瀉久孝●日はく「巻十の春去先三枝(ハルサレバマツサキクサ)の如きも「先つ咲き」と「三枝」とをかけたもので重長はこれを誤字としてあるが●今の訓の傍証として役立つべきものである」と。		
51 p30619	この目録なるは元暦本なるは朱に小さく書けり。	「この目録なる」の「なる」を削除するが「イキ」とし、「元暦本なるは」の「なる」は削除する。		書き入れ反映 (B)	昭和3年版に戻す
52 p30613	これは後人のさかしらにはあらざるべし。	「あらざるべし」の「るべし」を削除して、「じ」とする。		書き入れ反映 (B)	昭和3年版に戻す
53 p31215-6	かくてこの皇子は上の皇皇子の御歌にある住吉の弟日姫子とあるその人なるべしといふ説あり。	「御歌にある」の「ある」を削除し、「弟日姫子とあるその人なるべし」の「子」を削除し、「あ」を削除し、「いはれた」とする。		書き入れ反映 (B)	
54 p3131	呼兒鳥(ヨブコトリ)		「鳥(トリ)」の訓みを、「ドリ」とする。		
55 p31915	寝之不所宿爾	「寝」を削除し、「麻」とする。		書き入れ反映せず (B)	
56 p3281上	74		文鏡秘府論五續疑正誓之巴失爲當時運之使然		
57 p32916	同僧尼今の文の解に「又文鏡秘府論に「疑正中旨哉、爲當先經玄番設」等その他用例頗ぶる多し。	「等」の前に「又文鏡秘府論に「疑正中旨之巴失爲當時運之使然」を加える。「頗ぶる」の「ふ」を削除する。		書き入れに反映 (B)	

	昭和3年2月発行 【萬葉集講義】 巻第一	昭和3年3月発行 【萬葉集講義】 巻第一(B) 書き入れ部分	昭和3年3月発行 【萬葉集講義】 巻第一(A) 書き入れ部分	昭和7年発行	昭和13年発行 (3版)
58 p33617			軍防令義解 假令軍陣之法一隊十楯五楯列前五 楯列後楯別配兵五人		
59 p336110	貞観儀式を案するに、その「三月一日於鼓吹司試生等儀」のうちにもその証紙によりて軍隊を進退せしむる状を叙せり。	「貞観儀式」の前に、「按ずるに軍防令義解に「假令軍陣之法一隊十楯、五楯列前、五楯列後楯別配兵五人」とみえ、」を加える。また、「貞観儀式」の後の「を案する」を削除する。		書き入れ反映 (B)	
60 p35018	磐末等 (イハドコト)	「されど」の前に、「靈異記上第三十話に「鍾枝原三百段、日三百段、夕三百段合テ九百段毎日打迫」とあるは「夕段」を「夕ト」の意に用ひし例なり。」を加える。	「床(ドコ)」の訓みを「トコ」とする。		
61 p354110	「萬」に「ヨロヅ」の訓あるは論なし。されど、「段」を「夕ト」とよむ理由は殆定せりといふべからず。		鍾枝原三百段、日三百段、夕三百段合テ九百段毎日打迫 靈異記上、卅	書き入れ反映 (B)	
62 p355117	凡そ人の通行する處と定めたる線にあたるところは古今ともに「みち」といへり。この故に日本紀神代巻には海路をさして「うましみち」といへる語あり。			凡そ人の通行する處と定めたる線にあたる所は古今ともに「みち」といへり。日本紀神代巻には海路をさして「うましみち」といへる語あり。(B)	
63 p37612-3	さるは志貴皇子の宮は高圓にありしことは巻二の挽歌に見ゆればなり。	「高圓」を削除し、「春日」とする。「巻二の挽歌に見ゆれば」を削除し、「その追尊天皇の時の宣命に「御春日宮皇子」とあるにて考えらるる」を加える。	「高圓」を削除し、「春日」とする。「巻二の挽歌に見ゆれば」を削除し、「その追尊天皇の時の宣命に「御春日宮皇子」とあるにて考えらるる」を加える。	書き入れ反映 (B)	昭和3年版に戻す
64 p37614-15	甚しきに至りては誤字ありとして文字を改むるものさへあり。	甚しきは誤字ありとして文字を改むるものさへあり。		書き入れ反映 (B)	昭和3年版に戻す
65 奥付		昭和五年 月 日訂正増補再版印刷 昭和五年 月 日訂正増補再版発行			

